

設置体別にみた高校進学に対する学力と出身階層の影響

SSM 調査データを用いて

和歌山大学 西丸良一

1 問題の所在

教育機会が拡大すれば、進学行動に対する出身階層の影響が単純に縮小するわけではないことは、多くの研究で明らかにされてきた。そうしたなか、戦後、教育機会の拡大において、進学行動と出身階層の関連を検討する場合、まず注目するのは、高校進学と出身階層の関連であろう。潮木（1975）は、高校進学・不進学の規定要因は、本人の学力であるようにみえるが、家庭の所得も同等の規定力をもつことを示した。その後、高度成長期に合わせるかたちで高校進学は大衆化し、高校進学に対する出身階層の影響は縮小する。だが、同じ高校進学でも、学科という「質的」な点に出身階層の影響は転換していった（尾嶋・近藤 2000）。そのため、進学行動と出身階層の関連の検討は、進学した高校の学力・学科の質的差異（藤原 2012）に注目が置かれる。

このように質的差異はあるものの、高校進学が大衆化したことで、進学率という「量」に対する出身階層の差は縮小した。だが、その大衆化に大きく貢献したのは私立高校である。都道府県によって程度差はあるものの、特に高校進学拡大期は、公立高校に進学できなかった生徒を、私立高校が受け入れる位置づけにあった（香川ほか 2014）。また、一貫して現在まで、全高校生の 30%前後を私立高校が担ってきたことも学校基本調査から確認できる。高校進学の大衆化は、公立高校を私立高校が補完するようなかたちで成されたといえるのだ。では、公立高校よりも学校教育費の高い私立高校に補完され、高校進学が大衆化したならば、高校進学と学力・出身階層の関連に、設置体の違いはどのように作用したのか。本報告は、高校の設置体を考慮し、高校進学に対する学力と出身階層の影響を検討する。

2 方法

本報告は 2005 年 SSM 調査と 2015 年 SSM 調査（2017 年 2 月 27 日版（バージョン 070））の合併データを使用する。サンプルサイズの問題から、国立中学・高校出身者は分析から除外した。

3 分析結果と結論

男女別に分析をした結果、学力は男女とも、公立高校進学者がもっとも高く、ついで私立高校進学者、中卒者の順であった。公立高校進学者と私立高校進学者の間で、近年、学力差は小さくなる傾向にあるものの、順序は時代を経ても変化していない。ただし、女性の場合、中卒者にくらべ私立高校進学者の学力が高いのは、出身階層によるものであることが確認された。

男性が先行するかたちで高校進学が進んだなか、高校進学の大衆化に貢献した私立高校は、新制高校の発足当初から、女性に門戸を広げる傾向にあった。男性の高校進学状況に女性が後追いする過程で、私立高校が女性の高校進学者の多くを請け負ってきたことは大きな意義をもつ。しかし、門戸を広げた女性において、私立高校への入学選抜に用いられたであろう学力は、出身階層の高さによってもたらされたものであった。こうしたことは、当然、意図的になされたことではないだろうが、結局のところ、私立高校は疑似的に学力を用いて、高い出身階層の女性に高校進学教育機会を与える傾向にあったといえそうだ。

付記

本研究は JSPS 科研費特別推進研究事業（課題番号 25000001）にともなう成果の一つであり、本データ使用にあたっては 2015 年 SSM 調査データ管理委員会の許可を得た。